

# 園長先生の子育てひろば

令和5年5月

## 歌の法螺

園長 山中 文

富山県の民謡、こきりこ節をご存知でしょうか？いくつか歌詞がありますが、その中に“向かいの山をかづことすれば 荷縄が切れてかづかれん”と言うのがあります。向かいの山を担ごうとしたけど、荷縄が切れて担げなかったといった意味でしょう。山に荷縄を回して担ごうとしたと言うのですから、法螺話のような歌詞です。

高知県の民謡、よさこい節にもそんな歌詞があります。“言うたちいかんちやおらんくの池にゃ 塩ふくさかなが泳ぎよる”。これなどは、何を言っても勝てないよ、私の家の池には、鯨が泳いでいるんだからというような意味で、高知県全体が接している大きな湾を池に見立てた、なかなかの例えです。

民謡のこんな歌詞を見ると、厳しい生活や自然条件の中で、法螺を歌って笑い合う場面を作る人間のたくましさを感じるようにも思います。

子どもの中でも、こんな憂さ晴らしのような歌が流行ったり、歌を作り替えて遊ぶ場面が見られたりすることがあります。子どもが3歳の頃、「もみじ」（高野辰之作詞、岡野貞一作曲）を“あきのゆうひに てるやまもみじ…”と歌っていて、“山の麓のすそもよう”と歌う場面で、私の方を見て“山”をわざわざ“町”と歌い直して笑いかけたことがあります。「こんな風にも替えられるよ」と言いたかったのでしょうか。また、小動物のふれあいコーナーに行った時、うさぎがたくさん糞をしているのを見て、“だっこしておんぶしてまたウンチ”とうさぎに呼びかけたこともありました。これは、「げんこつやまのたぬきさん」（香山美子作詞、小森昭宏作曲）の“だっこしておんぶしてまたあした”を替えたものでしょう。ちょうどリズムよく言葉が当てはまると思ったのか、何度も繰り返しては、こちらにも同意を求めるように目線を送ってきたものでした。

こんなウィットに富んだ表現には、思わず大人も参ってしまいます。元歌を大事に歌う場面はもちろんまた別にあるでしょうが、子どもが作り替えて表現を楽しむ時は、何らか理由があります。よく状況から理解していき、共感できるものは共に楽しみたいものです。